

東京高専チャレンジウォークについて ～高専間教員交流報告～

Study on the Challenge Walk in Tokyo National College of Technology
～Report on the Faculty Exchange～

三原 大介
Daisuke MIHARA

1.はじめに

筆者は平成20年4月から21年3月までの1年間、東京工業高等専門学校（以下東京高専）にて高専間教員交流制度を利用する機会に恵まれた。本稿では、高専間教員交流の報告として東京高専の学校行事の中でとくにユニークであるチャレンジウォークを取り上げ紹介する。

チャレンジウォークは、歩く楽しさを知ることと、日常の生活では味わえない何かを体得することを目的として平成6年から毎年開催されており、平成21年には16回目の開催を迎えることになる。コースは、スタート地点の東京高専から、湘南・茅ヶ崎柳島海岸までの42.195kmのコースである。平成20年度は、10月25日(土)に実施された。

参加者は学生、教職員及び一般参加者である。平成19年度の第14回大会からは、目標を非日常的な体験をすることと定め、1年生は「全員参加」とし、実行委員会を組織し、教職員、学生及び後援会が協力して計画・運営を行った。それまで、平成17年度までは体育科の教員が行っていたが、平成18年度からは学生会が中心となって開催されている。第14回大会では、255名の学生が参加・チャレンジし、68パーセントの学生が、42.195kmを完歩した。

平成20年度開催の第15回大会において初の試みとして、株式会社コスモ・サイエンティフィック・システムが開発した「IC出席確認」ソリューションを導入した^{注1)}。携帯電話を利用したモバイルFeliCa技術^{注2)}を導入し、学生の安全管理に活用する認証実験を共同で行った。

本研究の目的は、チャレンジウォークのこれまでの歩みを振り返るとともに、それを支えて

きた東京高専スタッフの取り組みを紹介し、今後の課題を解決するための基礎資料を得ることである。

2.チャレンジウォークのこれまでの歩み

チャレンジウォークは、東京高専から神奈川県湘南・茅ヶ崎海岸までのフルマラソンの距離(42.195km)を実感し制限時間(8時間)内に歩き通そうとするものであり、災害時に自宅まで歩行で帰宅することを想定したサバイバルウォークとしての意図も兼ねるものでもあった。また、健康への意識の高まりからウォーキングブームとなり、水分補給の方法、よいシューズの選び方、サプリメントの摂取など健康に対する理論や方法論を前面に出したウォーカーも多いが、チャレンジウォークは好奇心や自然のままの感性を大切にしている¹⁾。



写真1 出発前のフットケア

当初、学校行事としての位置づけもなく、運動系クラブの秋季トレーニングとしてスタートすることになった。第1回チャレンジウォークは、

バドミントン部、ハンドボール部、野球部に所属する形をとり、25名の参加者と10名の学生スタッフ及び6名の教員スタッフで開催された²⁾。運営面も、任意参加の学生と教員による協力によって開催された。スタッフは手弁当で参加し、負担は大きかった。事前説明会を行い、実施要項・コース説明と諸注意などを行い、参加者の意識を高めた。

また、コースに関しては一般道を歩くため、安全面には特に配慮してきている。保護者の承諾を得ることを義務付け、任意の傷害保険に加入させた。コースは事前に下見を行い、全コースを実際に歩いてコース状況と危険箇所をチェックした。8箇所のチェックポイントを5km毎に設置し制限時間を60分に設定した。参加者の通過タイムをチェックしながら、健康状態を把握し給水サービスも行った。コース上には、チェックポイントとして利用させてもらうこともできるコンビニエンスストアが点在しており、食料や飲料水の補給、トイレの利用にも便利であった。また、参加者の通過確認、リタイアの状況の把握と緊急時に備え、携帯電話をレンタルし使用した。第1回大会では200名が完歩し5名が棄権したが、無事故で終了することができた。

しかし、ウォーキングを前提としたスタッフ配置をしたが、実際には走り出してしまう参加者がおり、スタッフ配置が間に合わなかった地点もあり、運営面での反省点もあった。



写真2 午前8時学校スタート

次に参加者の変化を見ると、当初は運動系クラブ所属者で始まったこの企画であったが、第2回大会には学生38名、卒業生2名が参加し開催さ

れ、第3回大会には教員も1名参加した。第4回大会には後援会長が参加し、その後、保護者へも参加が呼びかけられるようになり、保護者の参加者も増加していった。職員の参加は第11回大会が最初となった。

更に運営面での変化をみると、第1回大会では参加クラブの関係学生と学生会会長の10名の学生スタッフが運営に携わった。学生スタッフの役割は、チェックポイントや最後尾の補助など主に大会当日の補助役であった。また、スタート時には吹奏楽部がファンファーレを鳴らしてくれるようになり、写真部も記録写真の撮影に協力してくれた。第6回大会からはACC(アドベンチャー・クリエイション同好会)の学生が協力してくれた。ACCのメンバーは、大会当日の補助役や事前の企画や準備、スタッフの行動マニュアルを作成するなど、積極的に運営に携わるようになった。

こうして、裏方としてのスタッフの重要性を理解し、協力してくれる学生も育っていくことになる。第10回大会からは職員のスタッフが、第11回大会からは保護者もスタッフとして協力して加わるようになった。後援会では、ゴール地点で炊き出しをして支援をしてきていたが、運営には直接関わらず、後援会独自の活動として援護してきた。回を重ねる毎に学生・保護者・教職員が三位一体となって支え、盛り上げていく企画となったのである。

また、第1回大会から第14回大会までスタート地点の東京高専とゴール地点の平塚海岸は変わらないが、歩き易さと安全性の問題を考慮しながらコースは変更してきている。当初は幹線道路をコースとして設定したが、交通量が多く排気ガスの影響を受けるなどしたため、第3回大会には相模川に沿った遊歩道がコースに設定されている。また、秋の稲刈りの終わった田園の中を歩くコースも設定された。

さらに、第13回大会には25キロコースも設定したが、参加者は6名と少なかった。こうして、第14回大会まで安全性や自然と触れ合うことにも配慮しながらコースを改善してきている。また、この企画では、「チャ連字ウォーク」と称して、ゴールまでの思いを海岸で夕日を見ながら一句詠んでいる。また、5回(200km)完歩した参

加者には、「スーパーウォーカー」の称号が与えられる。これまでに、学生、卒業生そして保護者にもこの名誉ある称号が与えられている。第13回大会には学生76名、卒業生9名、保護者19名、一般参加者8名、教員5名、職員12名、25キロコースには6名の参加者と学生スタッフ14名、保護者スタッフ16名、教職員スタッフ10名の運営によって総勢175名で開催された。第1回大会では、総勢41名で開催された大会が、学生、卒業生、保護者、教職員の学校関係者全体を取り込むビッグイベントに成長したのである。平成6年から任意参加の小規模な企画として開催されてきたが、学内外からも多くの人たちのニーズがあり、参加者も年々増加してきている。安全面には特に配慮し、コース設定や運営方法も改善しながら規模を拡大してきたのである^{1) 2) 4)}。

3.1年生全員参加の企画へ

チャレンジウォークは、第13回までは学生向けの任意参加の企画として開催されてきた。また、学生からの多様なニーズにも対応してきた。大きな学校行事に対して小回りの効くプログラム・サービスを提供し、学生生活の活性化を目的として実施されてきた。しかし、平成19年度からチャレンジウォークは、1年生全員参加で実施することが計画されて、学校行事となるのである。

学校行事のもつ教育的意味として小川³⁾は、次の3点を挙げている。①全校、学年という大きな集団での実践活動を通じて日常の集団活動を深化・拡充すること。集団生活における規律や協力、

公共心の育成の場。②教師と生徒が一体となっ
て行われる学校行事を通じて、協力や協調の精神を培い、情操を豊かにし、学校生活のよい思い出がつくられること。③日常の学習の成果を総合的に実践し、活動する場、機会であり生徒の個性の伸長や自己の能力への自信を自覚させること、などである。

学校行事は学校生活の多くの思い出の代表として、人の生き方に深く関わってきた。学校行事の教育的意義を十分ふまえて、その機能や役割を考慮していくことが求められる。

東京高専ではもう一つの大きな学校行事である冬期学校（スキー教室）に大きな変革があった。冬期学校は、開校以来1月に2年生を対象にして実施される行事で、多くの教職員が学生と関わる唯一の行事である。平成12年度までは教員が学生のスキー実習を行い、教職員が3泊4日（指導員は4泊5日）で実施してきた行事であった。教職員全員の協力によって成り立っていた。しかし、平成13年度からは、実技指導の大部分は現地の指導員に任せ、教職員は学生主事、担任、数名の実技担当指教員と事務員の10名程度での2泊3日の行事に変わった。このことにより、この行事に対する意識も次第に薄れてきた。このような状況の中、チャレンジウォークの参加者は次第に増加してきた。チャレンジウォークは非日常的な性格を持ち、日常の緊張感からの開放としての役割を果たしていると言えよう。参加者の増加、継続性や非日常的な性格などチャレンジウォークは学校行事として、任意参加の行事から1年生全員参加の学校行事へと移行することになった。しかし、企画そのものの意義も変化することになり、新たな課題を抱えることになってくる。

4.まとめと今後の課題

くぬぎだ祭（学園祭）で実施されるくぬぎだフォーラムは、任意参加の企画のため、参加する学生も企画ごとに様々な小規模企画を提供してきている。しかし、人気がありリピーターが増える企画は単発で終わるものもある⁴⁾。それに対して、チャレンジウォークは継続して開催されており、規模も年々拡大してきている。こうして第14回大会から1年生全員が参加する学校

5月	学生会総会
5月	スポーツ大会
6月	沼津高専との対抗戦
7月	関東信越地区高専総合体育大会
8月	全国高専体育大会
8月	関東信越地区文化発表会
10月	チャレンジウォーク
10月	学生会総会
11月	くぬぎだ祭(学園祭)
11月	球技大会
1月	冬期学校
2月	校内駅伝大会

図1 東京高専の主な学校行事

行事となった。この小規模な企画が、学校行事となった理由には、前述のように、継続的に実施され発展してきたためであり、もう一点は非日常的な活動であるためということが挙げられよう¹⁾。学校行事として開催されるためには、その活動の継続性と教育的意義が認められなければならない。チャレンジウォークは14年間継続して開催され、その参加者も年々増加傾向にある(図2)。また、リピーターの増加、卒業生の参加者の増加傾向が見られることから、参加者に学校への帰属意識や充足感を十分与えてきている。

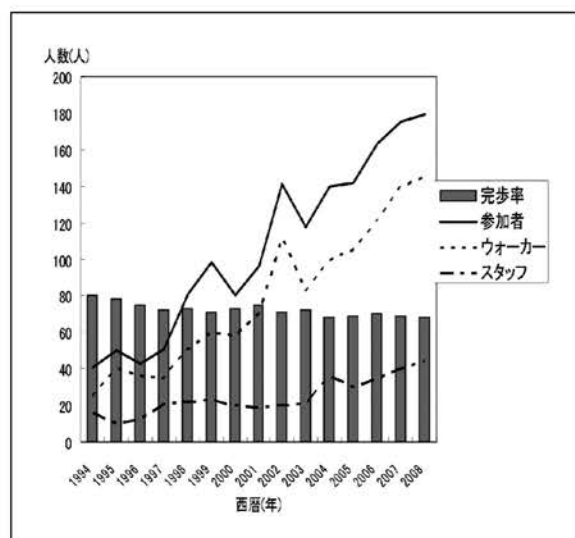


図2 チャレンジウォークの参加者数の推移

平成19年度には、教員は必ずクラブの顧問になることが義務付けられた。また、学生会活動に対しても積極的に支援していく動きが見られてきた。こうした中で、チャレンジウォークの1年生全員参加の学校行事にしようという動きが誕生したのである。これまで運営に参加してきた教員に加え、1年生担任、学生委員会メンバーが加わり、多数の教職員が協力するビッグイベントへと進展するのである。第14回大会は、1年生全員と上級生の任意参加者で実施されることになった。しかし、この企画がこれまでと異なる形式で実施されることで、新たな課題が生じた。そして、その課題を探り出すことで、新たな計画を立て、この企画の教育的意義を認め実施される取り組みが必要になってくる。

まず、参加者の量的な面をみると、1年生200名が参加することで、過去の参加者を越えてし

まい、また、1年生の保護者の参加も増加することが予想される。参加者数が増加することで交通面の安全確保とチェックポイントでの状況把握の困難さが挙げられる。スタート直後は、混雑が予想されるので、スタート直後の道路の横断には交通整理担当のスタッフを配置することや、時間差スタートさせるなどで対応している。スタートから最初の5kmのチェックポイントではほとんど差がなく到着するため当然混雑も予想された。しかし、筆者もスタッフとして参加した第15回大会では、非接触ICカード付携帯電話を利用したモバイルFeliCa技術によって、混雑も無く通過をチェックすることができた。

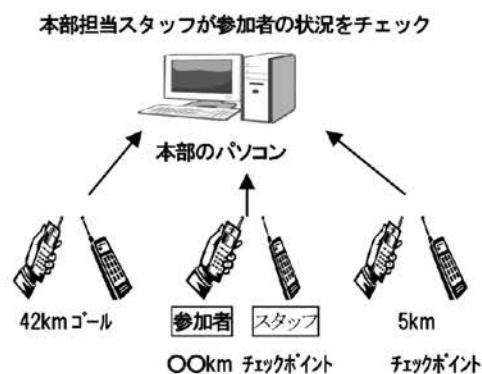


図3 ケータイでチェックポイント通過確認

また、チェックポイントでは、誘導スタッフの活躍で時間もかからず移動が行われた。スタッフも増員したが、搬送は移動車で行われ、参加者の通過確認やリタイア者の情報確認も携帯電話が便利であった。次に、質的な面から、まず参加者の体力面を見てみたい。全員参加では体力的に耐えられない学生も含むことになる。これらの学生は事前にチェックすることで運営に参加させている。また、事前に体育の授業などで、歩くトレーニングを行って体力の向上を図り、ペース配分を体得させている。学校周辺約3kmの距離を毎週歩いてトレーニングを実施した。これまでの任意参加の時には、参加者は企画の目的を理解し、自分の意思で自主的に参加してきた。中には自分の体力の限界を感じ、途中でリタイアする者もいたが、少しでも長く続けようとする意思是感じられた。しかし、全員参加になると、参加者の意識は多様化してくるであろう。そのために行事の目的を理解させ

るとともに参加者の動機付けが求められる。1年生はともかく、2年生以上の参加者を増加させることがこの学校行事の成功への条件であろう。



写真3 ゴール地点の平塚海岸

最後に今後の課題と対策をまとめると次のようになる。①安全面とくに交通への対策としては、時間差スタート、交通整理係の配置などを行う。服装もできるだけ明るい色、目立つ色を着用する。②通過ポイントでのチェック方法に対しては、携帯電話などの情報システムの活用が挙げられる。③トイレの利用に対しては、トイレの位置の確認と情報提供を事前説明会で行う。④一般参加者の定員制度の導入。人数が膨らみすぎても危険が多くなる。⑤事前のトレーニングを行い参加者の体力アップを図る。大会当日も血圧などのチェックを行い無理をさせない。⑥事前説明会を実施して参加者の動機付け対策を行う。

今後も様々な参加者からの要求や、想定外の場面に出会うこともあろうがその度に検討していかなければならないだろう。

5.おわりに

本稿では、チャレンジウォークの14年間の歩みを振り返り、初期の任意参加から1年生の全員参加の行事への移行に伴う課題を挙げてきた。筆者も初めてこのチャレンジウォークにスタッフの一員として参加させていただいた。事前の準備から開催当日の運営に至るまで、スタッフ全員の連携、協力によって成功することができた。東京高専の今後の学生生活の活性化に必ず繋がると思われる。

謝辞

本報告は独立行政法人国立高等専門学校機構の高専間教員交流制度の活動の一環として行われたものである。同機構並びに小山、東京両高専関係各位の温かいご支援、ご協力によって有意義な一年を過ごさせていただいた。心より感謝の意を表したい。

注

注1)本社 東京都千代田区飯田橋1-5-10

ソリューションとは、業務上の問題点の解決や要求の実現を行うための情報システムのこと。

<http://e-words.jp>

注2)携帯電話と非接触ICカード技術「FeliCa」を融合させたプラットフォームのこと。一般には「おさいふケータイ」として知られる。

<http://www.felica.networks.co.jp>

なお、「FeliCa」は、ソニー株式会社が開発した非接触ICカードの技術方式のことで登録商標。語源は(felicity:至福)からきている。

<http://www.sony.co.jp>

文献

- 1) 古屋正俊、鈴木智之、黒田一寿、佐藤義隆：チャレンジウォークの13年間の経緯と「任意参加型」から「全員参加型」への移行に伴う課題、論文集「高専教育」,Vol.31,pp.879-83(2008)
- 2) 古屋正俊、佐藤義隆、河東仁、鈴木智之：高専生活活性化に向けての試み、論文集「高専教育」,Vol.19,pp.338-45(1996)
- 3) 小川一郎編:高等学校ホームルーム担任読本」,p.112,文教書院(2007)
- 4) 古屋正俊、鈴木智之、黒田一寿 高専生活活性化に向けての試み(2),東京工業高等専門学校研究報告書,Vol.34,No.2,pp.29-34(2003)

小山工業高等専門学校 一般科
E-mail: mihara@oyama-ct.ac.jp

「受理年月日 2009年9月30日」

